



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	山田源一郎研究(I) : その生涯と教育的業績
Author(s)	筒石, 賢昭
Citation	東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・健康・スポーツ科学 , 55: 55-75
Issue Date	2003-10-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/2917">http://hdl.handle.net/2309/2917</a>
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

## 山田源一郎研究 (I) — その生涯と教育的業績

筒石賢昭

音楽\*

(2003年6月2日受理)

### まえがき

日本最初の私立音楽学校日本音楽学校の創始者山田源一郎は、本人履歴書によれば明治2<sup>1</sup> (1869)年10月17日、東京府士族 (旧曾我野藩) として、東京砺穀町 (昭和初期には地名変更により神田錦町) に生まれた我が国の音楽教育のあけぼのに活躍した音楽教育家である。本研究は山田源一郎の人物研究と彼が生きた明治・大正・昭和期の社会の音楽教育等の歩みについて、歴史的な史・資料を分類・分析することを通して明らかにするものである。山田源一郎の生きた時代は、明治維新を経て日本が急速に欧米の列強に仲間入りをしようとした時であった。教育においても学制 (1872) が公布され、学校における音楽教育が始まった時である。この時代はさまざまな因襲を断ち切って新しくなり、あるいは伝統をあらたな観点から捉えなおした非常に興味深い時期とも言える。山田の生き様を深くなぞることを通して、我が国における音楽教育の発展や日本最初の私立音楽学校である日本音楽学校創立の過程が新たな角度から見えてくると思われる。

### 1 山田の生きた時代と足跡 (1869～1902)

#### 1.1 誕生から音楽学校入学前までの時代背景 (1869～1884)

山田源一郎の生まれた明治2 (1869) 年は、英国の歩兵隊の楽長のジョン・ウィリアム・フェントン (John William Fenton) が、薩摩藩に軍楽を伝習した年であった。日本の西洋音楽の始まりは、軍楽隊のもたらす西洋の響きからであった。この軍楽隊の音楽が「文明開化」の調べのごとく日本人に珍しがられている一方で、宮内省の式部寮雅楽課につとめていた伶人<sup>2</sup>たちは、日本古来のものとして雅楽を伝えていた。しかし新しく明治の時代に入り、彼らにも宮中での外国の使臣等を接待する歓迎の音楽のために、雅楽に加えて西洋音楽をレパートリーに加えることが要求されたのである。

明治9 (1876) 年11月には、宮中で伶人が初めて欧州楽 (ヨーロッパ音楽) を演奏し、明治11 (1878) 年には雅楽稽古所での雅楽とヨーロッパ音楽の公開演奏会の記録も残っている。<sup>3</sup>また同年雅楽の音階による学校唱歌を作曲しており、楽器についても吹奏楽だけではあきたらずに、宮内省では明治12 (1879) 年雅楽課の芝葛鎮、<sup>しばふじつね</sup> 奥好義等<sup>おくよしよし</sup> 4名のものにピアノを習わせ、同年11月雅楽課内有志により「洋楽協会」が設立されてヨーロッパの管弦楽の研究を行うことになった。このように唱歌もピアノも宮中の雅楽の伶人達が先鞭をつけたことになる。

次に明治の音楽教育に影響を与えたのはキリスト教である。西洋の器楽音楽は我が国にまず軍楽として入ってきたが、声楽についてはキリスト教の賛美歌の影響も強かった。明治元 (1868) 年に浦上信徒弾圧事件が起こり、列国の猛烈な抗議の結果、明治6 (1873) 年にキリスト教禁止の高札が撤廃され、キリスト教の布教活動が活発化したことに伴い、この際に歌われる賛美歌もまた浸透していった。明治7 (1874) 年には6種の賛美歌集が出ている。海外の新しい知識を学ぶ際に必要な言語-英語-を宣教師が無料で教えたこともあって、キリスト教とその賛美歌は知識階級

\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

の中に浸透していったのである。統計によると、明治13 (1880) 年のプロテスタント各派の信者は2,700名であったのに対し、明治22 (1889) 年にはそれが31,800人にもなったのである。<sup>4</sup>この賛美歌の伴奏に使われたのはリード・オルガンと呼ばれるものであった。<sup>5</sup>これはアメリカン・オルガンと呼ばれるもので、アメリカでは宣教師が各地へ伝道に行く際に携行されていた。日本での洋楽普及の楽器としてはこのオルガンが大きな意義を持つことになるのは当然であった。

我が国の音楽教育を「学校」と言う組織的な教育の立場から眺めると、明治5 (1872) 年の学制発布がそのスタートラインと言えるだろう。我が国の教育制度は、主としてフランスの制度を模倣したが、実際の教育方法はアメリカの模倣と呼ばれた。学制で小学校で「唱歌」や中学校で「奏楽」という科目が決められたが、いずれも「当分之ヲ欠ク」と但し書きがあった。この「唱歌」という用語は、この学制の時に用いられた言葉であるが、実は、日本でも平安時代から唱歌（この場合は、しょうがと濁って発音する）と言う語は使われていたのである。これは邦楽でもよく使われているもので、器楽のメロディーを唱譜するいわば我が国のソルフェージュである。明治の「<sup>しょうが</sup>唱歌」は英語の song にあたるものである。科目として存在した「唱歌」であるが、この頃教科書、教材・教師・学校のいずれも音楽教育を実施するには準備が整わなかったのである。先に述べたキリスト教の私塾風な学校で賛美歌や英語の歌が教えられていたのみであった。

社会においては同年官営の富岡製糸工場が出来たり、新橋横浜間に鉄道が開通したりして、社会のインフラ整備も進められた。

## 1.2 音楽学校時代の山田源一郎 (1885~1889)

山田源一郎は明治18 (1885) 年9月11日、文部省直轄音楽取調掛へ入学した。この頃は欧米と同じく9月入学であった。学年は9月11日に始まり、翌年7月10日までの2期制であった。前期は、9月11日~翌年2月15日、後期は2月23日~7月10日までであった。修業年限は4年で、各学年は前期と後期に分かれ、合計8期であった。在学中の音楽取調掛のカリキュラム (学科課程) は、明治16年に決められた「音楽取調掛規則および教則」に準拠しており、次のようなものである。

「修身」「唱歌」(単音、複音、三重音、四重音、高等歌曲)「洋琴」(ピアノ)(右手、左手、両手、長音階、短音階、装飾法、半音階)「風琴」(歌曲練習)「箏」(調弦法、単弦法、複弾法)「胡弓」(用弦法、歌曲練習)「専門楽器」(管弦楽器、箏、胡弓)「和声学」(音程、三和音、転回、七の和弦(ママ)、反復進行、静止法(ママ)等、転調、掛留法、調和法、楽曲製作法)「音楽論」(楽譜解釈、写譜法、楽典、音楽理論)「音楽史」(本邦及び欧州)「音楽教授法」(唱歌教授法、実地教授練習)であった。

山田源一郎は、明治20 (1887) 年師範部と専修部が分設された際、専修部に編入学し、明治22 (1889) 年に首席で卒業した。

初期の音楽取調掛には以下のような楽器が備えられていた。

洋楽器としては、ピアノ、バイオリン、ピオラ、チェロ、ダブルベース、クラリネット、フルートがあり、これらは明治13 (1880) 年6月にL.W.メーソンがボストンの楽器店から購入したものであった。

次に和楽器としては、雅楽用と俗楽用があり、雅楽用としては、笙、笛、篳篥、箏、琵琶、鞆鼓、大鼓(ママ)、鉦鼓が備えられてあり、俗楽用では、琴、三味線、胡弓があった。唱歌教育に必要な楽器としては洋琴と風琴(オルガン)があげられるが、これらの楽器はこの当時輸入に頼らなければならない上、非常に高価なことから個人で所有することは非常に希であった。明治14 (1881) 年3月、メーソン所有のオルガン2台が買い上げられ、1台は授業用に、損傷していたもう1台は、解体して構造を研究し試作することになった。

明治17 (1884) 年の文部省音楽取調掛規則の第一章総則の第三条によれば、明治16 (1883) 年から女子の入学が禁じられた。理由としては官立の教育機関で男女共学が許されていないからである。音楽取調掛だけは、教育の内容上共学を認める動きもあったが、やはり男女どちらか一方にしてはというのが文部省からの達しであった。そこで将来国家にとって役に立つのは男子という当時の考え方から、女子が締め出されることになった。ところがそれも長く続かず、女子に音楽教育は適しており、かつ必要であるという見解から、明治20 (1887) 年3月には女子の入学が復活し、官立唯一の男女共学校になった。伊澤修二掛長は伝習生用の「音楽伝習取締心得」の第一条で、男女間には一線をしき、みだりに交流することなく伝習に励むように命じている。

明治20 (1887) 年5月2日、音楽取調掛は山田源一郎に音楽取調掛生徒頭を命じた。このことは同級生の中でも山

田が信頼を得ていたことを物語るものである。その年我が国最初の弦楽四重奏団が編成され、山田はそのメンバーに加わった。パートとメンバーは、

第一ヴァイオリン 幸田延子  
 第二ヴァイオリン 山田源一郎  
 ヴィオラ 納所弁次郎  
 セロ 比留間賢八

であった。この年音楽取調掛は唱歌集として『幼稚園唱歌集』を刊行した。社会に目を転じると東京府中に初めて電灯が付き、また鹿鳴館では仮装舞踏会が開催され、西洋文化が主に上流階級を通して普及していった。

同年7月9日に、明<sup>はるのみや</sup>宮殿下（大正天皇の皇太子時代の官号）、諸官省諸官吏、諸国公使の臨席を仰いで、音楽取調掛演奏会が開かれた。この演奏会では、唱歌、管弦楽、洋琴が演奏された。山田源一郎は洋琴（ピアノ）を担当し、ジュールホッフ編曲のモザート（モーツァルト）の交響曲の一部を演奏した。この演奏会は、

…上の音楽は何れも高尚の曲にして、吾等記者のごとき辛うじて小学唱歌の初歩を解するが如きものには得て委しく評論せらるべきことにあらず、されど之を前会の演奏会に比較せば、其技の進歩せし程は明にして、数多の研究生中には自ら楽器に長ぜられたるものもあり、唱歌に妙を得足るものもありて、大に内外人の聴衆を感動せしめたり…と評された。<sup>6</sup>

明治21（1888）年には、音楽取調掛が東京音楽学校に改称されて、伊澤修二がそのまま初代東京音楽学校長に就任した。明治22（1889）年から音楽学校は専修部（本科）と師範部の二部制になった。

明治22（1889）年7月6日に山田は東京音楽学校専修部全科を卒業した。卒業生は山田源一郎（東京）の他、小出雷吉（兵庫）、高木次雄（東京）、鷹野国蔵（東京）の4名であった。東京音楽学校は初めて本科生を送り出した。この日伊澤校長は、同校の沿革とそれまでの事業について説明し、卒業生に社会人としての自覚を促すスピーチを行った。またこの卒業式では山田は総代で次のような謝辞を述べた。<sup>7</sup>

…私共此度本校所定の学科を卒業致しまして、本日卒業証書を受くるの榮を得ましたのは、誠に有り難き仕合と存じます。私共は生来学理に暗く芸術に拙きものにて、敢てこの榮譽をになうには堪へませんこととござりますけれど、幸ひに今日至りましたのは、特に本校校長の薫陶と教師幹事諸君の教誡とに由りて実に此恩賜を得たる事と存じます。今又校長閣下の論旨と文部次官閣下の訓辞とを賜り感佩のいたりに堪えませぬ。源一郎不肖ながらも同窓の卒業生と共に、堅く相誓て益々励みて、其論旨を体し其訓辞を奏し終始之に戻らざる様、仕るべし源一郎不敏を顧みず卒業生四名に代り謹んで謝辞を呈す。（手書き）

この年東京音楽学校は東京音楽学校編『箏曲集』、『中等唱歌集』を刊行した。またこの年に日本での最初のピアノが製造された。

### 1.3 音楽学校卒業から東京音楽学校助教授になるまでの山田源一郎（1889～1893）

東京音楽学校を卒業した山田は引き続き東京音楽学校の研究生となり、音楽学校の授業の補助を命じられた。この授業の補助は、明治24（1891）年の10月まで続けた。明治23（1890）年4月25日に高等師範学校附属学校唱歌教授嘱託となった。同年の9月16日には、尋常師範学校、尋常中学校及び高等女学校音楽科教員免許状を文部省から取得し、東京府尋常中学校から唱歌授業を嘱託された。この年の12月頃、東京府唱歌速成伝習所卒業試験担当となった。ここで山田源一郎は「音楽理論」を担当した。他に「唱歌」は、辻則承、「風琴」は、田丸某が担当した。この唱歌速成伝習所は、翌年の3月31日に諸般の事情により閉鎖された。

この年は教育勅語が発布された年である。この勅語は昭和23（1948）年に衆参議両院で排除失効確認がなされるまで、日本の教育の支柱のみならず、国家思想の中心として絶大な影響力をおよぼした。

明治24（1891）年11月19日には、大阪府尋常師範学校助教授兼大阪府尋常中学校助教諭として任命され大阪に行くことになった。山田源一郎は学校での指導の他に講習会も積極的に行い、堺市の教育界には「先師山田源一郎氏講習会以来、今猶続いて月々に講習会を催され、堺市各小学校教員諸氏の如きは実に熱心感服するにあまりある」という記録<sup>8</sup>も残っている。

この年唱歌集としては小山作之助の『国民唱歌集』、理論書としては、鳥居忱の『音楽理論』が出版された。また

この年「小学校祝日大祭日儀式規定」、「小学校教員検定等に関する規則」が作られた。

翌年の明治25 (1892) 年3月には、伊澤修二が『小学唱歌』(全6冊)を明治26年までに順次発行したが、これについて堀内敬三や井上武士 (1991) は次のように述べている。<sup>9</sup>

…この中には当時の新進音楽家、目賀田万世吉、山田源一郎、依田弁之助、内田金太郎等の新作が載せられているが、これらも伊澤修二の新人起用、新作奨励の理想の実現と見ることが出来る…

4月28日には、『祝日大祭日歌詞曲』を嘱託された。また6月17日に大阪府小学校教員乙種検定員を任命された。山田源一郎はその後大阪から東京に戻り、8月27日東京府尋常師範学校助教諭に、10月10日には東京府小学校教員乙種検定員に任命された。また彼は明治26 (1893) 年5月31日には小学校教員定期講習科講師を勉めた。

#### 東京音楽学校存廃問題

明治26 (1893) 年東京音楽学校存廃問題が起り、伊澤修二が東京音楽学校長を離職した。6月には東京音楽学校が高等師範学校附属音楽学校に校名変更した。この背景には帝国議会議を舞台とした音楽学校存廃論争があった。議会では経費削減の面から立憲自由党が音楽学校の廃止を主張し、一方の改進黨はともかくも存続させる方針を打ち出した。激論の末音楽学校は廃止を免れた。しかしながら音楽学校の経費を削減すべきと言う声が議会から消え去ったわけではなく、6月に高等師範学校附属学校の中に吸収されることになったのである。再び音楽学校という名称になるのは、明治32 (1899) 年のことである。

#### 唱歌教習所の設立

この頃私設の唱歌教習所が相次いでに設けられた。学校唱歌教習所(会)とは、民間において唱歌を教える教習所のようなものである。この設置理由は、東京音楽学校の卒業生だけでは、まだまだ全国的には唱歌教員が圧倒的に不足しており、しかも全国の小学校では唱歌を教えなければならないので、唱歌教員の養成をする必要性があったからである。唱歌教習所は本来、小学校教員に唱歌とリード・オルガン<sup>つじのりうけ</sup>を伝習するところであったが、一般の愛好者もこれに続き、さらには官立の音楽学校へ入学する者の入学準備の予備校的な性格も持つようになってきたのである。

著名なものは、小山作之助が芝愛宕町で開いた「芝唱歌会」や鳥居忱が神田今川小路で起こした「東京唱歌会」である。他には「東京唱歌専門学校」や「東京音楽講習所」がある。公的なものとしては、東京府の「唱歌促成伝習所」が明治26 (1893) 年6月に設けられ、ここで山田源一郎や辻則承らが講師として小学校教員に唱歌の講習をした。例えば7月25日に開催された学校唱歌講習会は、東京市神田錦町三丁目一番地におかれ、会長は伊澤修二、講師が山田の他、小山作之助といった当時の斯界を代表する人たちであった。唱歌の講習会はこの後全国各所に開設された。

#### 1.4 東京音楽学校勤務時代の山田源一郎 (1894~1903)

明治26 (1893) 年9月22日に高等師範学校附属音楽学校教務嘱託となり、「唱歌」「オルガン」「ヴァイオリン」を担当した。この頃軍歌も盛んに歌われていることから、11月頃臨時大捷軍歌講習会講師も行っている。

軍歌に関しては、日清戦争前後から甚に浸透していった。それらの軍歌はリズムカルな上に、西洋音階の第四音(ファ)と第七音(シ)を省略した、いわゆる「ヨナ抜き音階」で作られ、五音階的で親しみやすかったために一時は学校でも盛んに歌われた。山田源一郎は、当時の代表的な音楽教育家小山作之助もそうであったように明治27 (1894) 年には『大捷軍歌(全7編)』の第一編を刊行している。堀内や井上 (1991) は次のように述べている。<sup>10</sup>

…これらの歌は戦況を描写するニュース性と、武士道精神にもとづく英雄叙事詩的な性格のために時流に投じ、戦時的流行歌となって小中学生のみならず一般社会人にも広く歌われた。これらの軍歌集はみな文部省検定済となっていて、文部省は戦意昂揚のためにこれを奨励したが、従来の唱歌の道徳性ないし花鳥風月の、時流に超然たる歌詞にくらべて、これらの歌のニュース的・叙事詩的な内容が、自発的な共感を生んだのである。…

しかし明治37 (1904) 年、日露戦争前後の軍歌が学校ではそれほど浸透しなかったのは、それらが学校の教材に取り入れなかったからと考えられる。堀内敬三は、次のように語っている。<sup>11</sup>

…私はその当時東京高等師範附属小学校で田村虎蔵先生から唱歌を習っていたが軍歌は一つも教わらなかった。…

軍歌の単純さに満足しない教師たちは、音楽と他教科との統合を考えた歌、例えば『世界一週唱歌』明治34 (1901) 年などの歌を作って教えた。

山田が高等師範学校附属音楽学校助教授に就任したのは、明治28（1895）年9月7日であった。明治29（1896）年3月には幻灯会の演奏会が神田の基督教青年会館で開かれたが、バイオリンとフルート合奏で、フルート奥好義、バイオリン山田源一郎の記録が見られる。

4月18日には、音楽学校の同窓会組織「同声会」の春季第一回音楽演奏会（幸田延子帰朝紹介演奏会）で、第一部の6番目のプログラムの弦楽四重奏に加わった。曲目は、ヘイデン（ハイドン）作曲の「弦楽四重奏曲第一番」で、パートとメンバーは、明治20（1887）年と同じく、

第一ヴァイオリン	幸田延子
第二ヴァイオリン	山田源一郎
ヴィオラ	納所辨次郎
セロ	比留間賢八

であった。

同年9月17日と23日に学術研究と音楽実情視察として、千葉、茨城県下を巡回した。年の瀬も押し迫った12月28日静岡県下へ旅行の際沼津御用邸に滞在中の東宮殿下の御前で演奏する栄誉を賜った。当時の新聞記事<sup>12</sup>は、  
...音楽学校教官山田源一郎氏外3名の人々は、先程中静岡県下へ旅行の際沼津御用邸に御滞在の東宮殿下のお召しに応じ去月28日午後畏くも殿下の御前に於いて日清戦争の実況を申し上げ次にバイオリン、フルート、オルガン、唱歌数曲を演奏したるに頗る御感賞遊ばされ……と記している。

明治30（1897）年の6月5日には、学友会演奏会で、名誉員という肩書きで第一部の唱歌の部でシルヒェル作曲の「去率撃たな」を指揮した。10月26日にも、学友会演奏会で第一部の唱歌（単音）の指揮をしている。曲目は、シルヘル（ジルヒャー）作曲、鳥居忱作歌の「ローレライ」と中等唱歌集のうち「火砲の雷」であった。年も押し迫った12月24日の学友会演奏会では、同じく第一部の唱歌（単音）の指揮をしている。曲目はメンデルスゾーン作曲、中村秋香作歌の「昨日今日」とケルネル作曲、鳥居忱作歌の「書生の旅」であった。

この年の2月山田源一郎は、『新唱歌』（老）、明治31（1898）年5月には（忒）を刊行している。学友会演奏会は明治31年6月11日にも行われ、曲目はシシリヤ国風、里見義作歌「羽生の宿」とワグネル作曲、鳥居忱作歌の「高砂」であった。

山田源一郎は再び明治31（1898）年2月13日に、学校唱歌会講師となった。会長は伊澤修二で講師は小山作之助、山田源一郎、小出雷吉、高木たけ、橋本正文、橋本好太郎、丸山文六郎であった。場所は神田錦町三丁目一番地の同会本部であった。6月11日には、音楽学校学友会臨時音楽会で唱歌を指揮した。7月14日には音楽学校楽器掛に任命された。

#### 明治音楽会の誕生と山田源一郎

山田源一郎は明治31（1898）年1月我が国最初の民間管弦楽団で、東京音楽学校関係者及び宮内省関係者等により設立された「明治音楽会」設立のメンバーに加わった。会長は上原六四郎であった。上原は、明治26（1893）年、東京音楽学校が高等師範学校附属音楽学校に校名変更したときの主事であり、明治29（1896）年には、『俗楽旋律考』を著している。

この団体は明治43（1910）年12月までに54回の演奏会を開いた。活動の範囲は東京だけではなく関西地方へも出張して西洋音楽を広く紹介した。組織の構成は次のようになっている。

会長： 上原六四郎

会員： 島崎赤太郎、納所辨次郎、比留間賢八、鈴木末次郎、山田源一郎、高浜孝一、前田九八、天谷秀（以上東京音楽学校教員と出身者）、多忠基、藺広虎、藺十一郎、多忠行、多忠龍、多忠告、芝忠重（以上宮内省楽部）、大村恕三郎、金須嘉之進ら二十数名で、神田のYMCAや本郷中央会堂などで演奏会を行った。演奏の種目は管弦楽であったが独奏や独唱もあり、邦楽・雅楽を加える場合もあった。例えば、明治31（1898）年1月21日に行われた明治音楽会の第一回の演奏会のプログラムでは、「ドナウ川のさざ波」や「トロイメライ」などの西洋のクラシックの曲と並んで、長唄や勧進帳も演じられた。

#### 東京府尋常師範学校音楽倶楽部の指導と『女学唱歌』の刊行

明治32（1899）年6月頃に、東京府尋常師範学校内生徒有志にて、音楽倶楽部が設立されたが、山田源一郎はその指導者となった。音楽倶楽部の設立目的は、「社会に行はるる卑猥の俗曲を改良すること」であった。<sup>13</sup> 明治34

～35 (1901～1902) 年にかけて、山田源一郎は『女学唱歌』を刊行した。これらは次のステップとしても重要なものであった。

## 2. 音楽遊戯協会～日本音楽学校時代 (1903～1927)

### 2.1 音楽遊戯協会の創立と『音楽新報』の刊行

明治36 (1903) 年8月に音楽遊戯協会 (音楽指導と幼稚園教員養成機関) が創立された。当時我が国は、ようやく幼児教育が盛んになった時期であったが、保育適任者がいなく、またこの指導のための施設もなかった。そこで山田源一郎は、神田淡路町に、「音楽遊技協会」を設立し、音楽遊技と幼稚園教員の養成を計画し実施したのであった。我が国最初の私立音楽学校の嚆矢であり、名誉会長は伊澤修二で理事長は山田源一郎であった。

その講習所の規則は次のようになっている。

「音楽遊戯協会講習所規則」出典：明治三十七年六月「音楽新報第一巻第四号」

一、目的 本会講習所は男女をとらず普く音楽科遊戯科教員志望者又は音楽、遊戯研究志望者の為適当なる教授を施すを以て目的とす。

一、場所 本会講習所は当分東京市神田区淡路町二丁目四番地に置く。

一、学科 学科を分かちて普通科高等科及び専修科の三科とし修業年限を各一ヶ年とす。(但し専修科はこの限りにあらず)

普通科は小学校唱歌科遊技科教員、高等科は中等程度の各学校音楽科遊戯科教員養成のため、専修科は特に志望の科目を専攻せんものとする者の為に之を設く。

一、受験科 東京音楽学校入学志願者の為に之を設く。

一、課目 唱歌 楽器 (オルガン ヴァイオリン 又はピアノ等) 楽理 和声学 教授法 遊戯舞踏  
和声学は高等科生に限り之を課す。

専修科生には唱歌楽器又は遊戯舞踏の内若しくは教科目を任意選択せしむ。

明治37 (1904) 年には、山田源一郎が主宰となって雑誌『音楽新報』を刊行した。(明治41年からは『音楽』(山本正夫主宰)と合併して、『音楽界』と改称した。)

「音楽遊戯協会」は、明治37 (1904) 年には、神田錦町に移転した。明治38 (1905) 年には日本音楽学校への校名変更も計画した。

校名変更に関して興味深いエピソード<sup>14</sup>がある。当時小山作之助から校名を「山田音楽学校」としては、とのすめもあったが結局「日本音楽学校」としその認可について当局へ提出したと言うことである。

同年8月音楽遊戯協会が日本音楽学校と改称した。最初の生徒募集は次のようなものである。

私立 日本音楽学校 生徒募集 音楽遊戯協会講習所改称

東京神田錦町三丁目十一番地  
出典：明治三十八年十一月  
「音楽新報第二巻菊花号」

学科

普通科 小学校唱歌科教科教員志望者の為め之を設け修業年限を一ヶ年とす。

本科 中等程度の各学校音楽科教員志望者の為め之を設け修業年限を二ヶ年とす。

受験科 官立東京音楽学校入学志願者の為に之を設け修業年限を一ヶ年とす。

専修科 特に志望の学科目を専攻せんものとする者の為に之を設け修業年限を二ヶ年とす。

箏曲専修科は従来の幣風を矯正するため特に教授法を一新せり。

研究科 本科並びに専修科卒業生にして声楽もしくは器楽を専攻せんとする者の為に之を設く。

本校 は明治三十六年九月の創立にして爾来教授は懇切を旨とし成績甚だ佳良なり。

本校 受験科生にして官立東京音楽学校へ入学せるもの百余名。

科目

児童遊戯、遊戯表出体操、国語、箏曲、ピアノ、オルガン、舞踏、ヴァイオリン、唱歌、和声楽、楽理、英語  
以下略

## 2.2 私立女子音楽学校の設立

当時は、中等教育における男女共学について議論が多かった時代であり、認可が下りずやむを得ず、明治39 (1906) 年1月12日女子音楽学校の認可願いを東京府知事に申請したのであった。東京都公文書館所蔵の書類<sup>15</sup>によれば、私立各種学校の第一巻十三番目に設立認可並報告が載っている。規則は次のようなものである。

### 私立女子音楽学校規則

東京神田錦町三丁目十一番地

明治三十九年一月

#### 第一章 目的

第一條 本校は普く正則に音楽を修めんと欲し又は音楽科教員たらんことを志望し、若しくは官立音楽学校に入学せんと欲する女子の爲めに適當なる教授を施すを以て目的とす。

#### 第二章 学科

第二條 本校は左の諸学科を置く。

- 一、普通科 音楽普通の智識技能を養成し若しくは官立音楽学校入学志望者の爲めに予習をなすを以て目的とし、修業年限を一ヶ年とす。
- 一、本科 音楽専門の教育を授くるを以て目的とし修業年限を二ヶ年とす。
- 一、専修科 特に志望の学科を専修せんとするものの爲に之を設け修業年限を二ヶ年とす。

#### 第三章 学年学期及び休業

第三條 学年は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

第四條 学年を分ちて左の二学期とす。

第一学期 四月一日より九月三十日に至る。

第二学期 十月一日より翌年三月三十一日に至る。

第五條 本校休業日は左の如し

日曜日、大祭祝日、本校創立記念日 夏季休業 (自七月二十五日至八月三十一日)、冬季休業 (十二月二十五日至一月七日)

#### 第四章 授業時間

第六條 授業時間は毎日午後三時より午後六時迄とす。

#### 第五章 学科課程及毎週授業時数

第七條 普通科の学科課程及毎週授業時数左の如し。

#### 科目

科目・学期	第一学期	時 数	第二学期	時 数
倫理	人倫道德の要旨	1	同上	1
唱歌	声音 音階 和絃練習 単音唱歌	10	同上 複音唱歌	10
ピアノ又はオルガン、	ピアノ教則本 手指運用 音階練習 踏板練習 オルガン教則本	2	同上 進行曲	2
楽理	総論 楽譜 拍子 音程 音階 各種記号	1	同上	1
*唱歌教授法			小学唱歌教授法大意	1
国語	購読 文法 作文	2	同上	2
英語	購読 綴字 習字	2	同上	2
合計		18		19

\*唱歌教授法は音楽教員志望の者に限り之を課す。



第八條 本科の学科課程及授業時間数次の如し

科目・学期	第一学年				第二学年			
	第一学期	時数	第二学期	時数	第一学期	時数	第二学期	時数
唱歌専修科	声音 音階 和絃 音程練習 複音唱歌	10	同上 複音唱歌	10	同上 三部合唱	10	同上	8
ピアノ専修科	手指運用 音階練習 曲譜練習	2	同上	2	同上	2	同上	2
オルガン 専修科	手指運用 音階練習 曲譜練習	2	同上	2	同上	2	同上	2
ヴァイオリン 専修科	姿勢 用弓法 手指練習 曲譜練習	2	同上	2	同上	2	同上	2
箏曲専修科	手指運用 歌曲練習	3	同上	3	同上	3	同上	3

\*各専修科共随意科目として楽理を課す。

第六章以下略

職員一覧

校長 事務取扱 山田源一郎

幹事 山田源一郎

書記 成田勇次郎, 島田啓

講師 (イロハ順)

神戸絢子, 田中いち子, 宇田四郎, 楠美恩三郎, 山田源一郎, 小林貞子, 天吾秀, 金須嘉之進, 宮島慎三郎, 後藤春子

一方男子のためには、別に「日本音楽協会」という名称の学校を附設して音楽教育を行うことにした。

この当時設立された他の音楽学校は、東京音楽院（院長天谷秀。神田今川小路、大正八年院長の死により廃校）、女子音楽園（園長松山鑑子。渋谷常磐松、のち東京女子音楽学校と改め昭和14（1939）年廃校）、東洋音楽学校（校長東京高等師範学校教諭鈴木米次郎。現在の東京音楽大学）などである。

大正12（1923）年の関東大震災後、学校は一時本郷に移り、更に麻布に転じ、ついで中野（東京府下中野町打越2021）に移り、ここに永久的設備を施し一応の安定を見た。

#### 学苑会と創作オペラー日本のオペラ運動を支えた山田源一郎

明治39（1906）年山田源一郎のもとに、文学者小林愛雄、作曲家小松耕輔が参じて日本のオペラの創作と上演を目的として「学苑会」（後に日本歌劇会と改称）を組織した。第一回試演として6月2日に神田のYMCAで小松の作詞、作曲による『羽衣』を上演した。<sup>16</sup>

この当時小松耕輔はまだ東京音楽学校の本科器楽部の最上級生として在学中であった。『羽衣』の合唱を女子音楽学校と東京高等師範学校の生徒が担当した。また山田は平木白星の『都良香』（みやこのよしか）に作曲して演奏した。これは二部合唱の曲であった。この『都良香』の演奏批評が明治39（1906）年7月号の「音楽新報」に載っている。

…この夜聴物『都良香』なり、平木白星氏が歌を山田源一郎氏が曲せしものとして、学趣の表現殆ど遺憾なく、第二歌より…旋律動くごとに妙興湧き出て、高音に当たりたる須藤春子女史なだらかに美音よくうたひ、低音の宮島慎三郎氏またすこぶる力めてよく合唱の妙を發揮したり。…<sup>17</sup>

学苑会の第二回の公演は、明治40（1907）年東京牛込高等演芸館で行われた。プログラムは小林愛雄作、小松耕輔作曲の歌劇『霊鐘』、小林愛雄作、沢田柳吉作曲のパントマイム『影法師』、グノー作曲、小林愛雄訳詞の歌劇「ファウスト」第一幕とほかに邦舞「浦島」であった。

#### 当時の学生の音楽団体

明治40年頃から学生の音楽団体が結成されてきた。今でも活躍中の慶応のワグネルソサエティ（明治35年創立）や、東京高等師範学校の大塚音楽会、広島高等師範学校の丁未音楽会、早稲田の早稲田音楽会、東京高工の蔵前音楽会などがあげられる。

山田は、明治大学の音楽部に招聘されたが「音楽界」に次のように評された。<sup>18</sup>  
…学友会にては過般運動部を拡張し足るが其余力を持って今回音楽部を新設し女子音楽学校校長山田源一郎氏を招聘し大に音楽趣味の修養を計る筈にて近々大演奏をもよおすべし…

#### 山田源一郎と唱歌集

明治時代東京音楽学校は師範学校、中学校、高等女学校の教科書用に『中等唱歌集』（明治22, 1889年）『中学唱歌』（明治34, 1901年）、『中等唱歌』（明治42, 1909）の三種類の唱歌集を編纂出版した。当初の教科書教材の基本的方針として、東京音楽学校は次のように捉えていた。<sup>19</sup>

…曲の多くは外国の名歌を選び、その内容は、音楽取調掛以来の方法で、そのメロディーに日本語の歌詞を当てはめた。それは歌詞と内容的に必ずしも一致したものではない。…

このうち山田が関わったのは、『中学唱歌』と『中等唱歌』である。著作権が東京音楽学校にあるため、作曲・作者名が記載されていないが、『中学唱歌』には、滝廉太郎の有名な「箱根八里」や「荒城の月」も収められている。山田の曲は、「甲鐵艦」である。明治34年5月19日、この中学唱歌の披露演奏会が行われた。

『中学唱歌』は、東京音楽学校が出版した唱歌の中で初めてのピアノ伴奏楽譜付きのものである。従来多くの例にならって、ヨーロッパの曲に歌詞をつけた曲が多い。邦人の作曲としては、山田源一郎の他小山作之助や納所辨次郎らの曲が見られる。唱歌集と言うよりも歌曲集の体裁である。

また明治40（1907）年8月には、山田源一郎が『中等教育唱歌集』を刊行した。この歌集について堀内・井上（1991）は次のように評価している。<sup>20</sup>

…（唱歌集は）中等学校用のものも多いが、近藤逸五郎編『女声唱歌』明治42年11月、山田源一郎編『中等教育唱歌集』明治40年8月、北村季晴編『中等音楽教科書』明治41年4月がすぐれていた。…

明治42年5月には、東京音楽学校編『中等唱歌』の刊行にも以下のように記されている。<sup>21</sup>  
…外国曲もあり、また我が国の新作ものせられている。中でも次の数種は、中等学校だけではなく、小学校でも愛唱された。『胡蝶』（ドイツ民謡、鳥居忱作詞）、『ウォーターロー』（土井晚翠作詞、山田源一郎作曲）、『湖上の月』（ロッシェニ作曲、吉岡郷甫作曲）、『氷滑』（ドイツ民謡、乙骨三郎作詞）…

#### 評価の高い女子音楽学校—音楽学校評判記

女子音楽学校の生徒は「楽苑会」のオペラの合唱を担当してその評価を高めた。また大正15（1926）年11月に出版された『内外音楽年鑑』では、音楽学校評判記が載っており、そこで女子音楽学校のことを、「私立音楽学校中一番古い歴史を持っており、今から十数年前神田の淡路町に音楽遊戯協会と言う講習所を設けたのが始まりで、特に声楽の巧い女子音楽学校」として紹介されている。<sup>22</sup>

### 2.3 日本音楽学校への校名変更

大正13（1924）年8月28日には校長の山田は東京府知事宇佐見勝夫に「校則一部変更」の書類を提出している。この資料により当時の「女子音楽学校」の諸事情が分かる。

規則改正事由

イ. 教職員増加

旧 校長外講師 24名 嘱託3名 事務員3名 計30名

新 校長外教授 7名 講師18名 嘱託3名 事務員4名 計32名

ロ. 学級の増加

旧 本科2学級

新 本科4学級 研究科 2学級新設

大正13 (1924) 年7月現在在籍数は、

本科97名 普通科92名 研究科15名 専修科51名の計255名であった。

また大正14 (1925) 年の入学案内によると、

学科は、

普通科 修業年限 一ケ年

本科 修業年限 二ケ年

専修科 修業年限 二ケ年

研究科 修業年限 一ケ年

となっている。

学科目は、

倫理、声楽、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、マンドリン、ギター、セロ、箏曲、楽理、和声学、教授法、国語、英語

である。

その後学校を専門学校に昇格する準備を進め、校則を改正し、昭和2 (1927) 年には校名を「日本音楽学校」と改め、男女共学制として申請し認可を得た。

#### 2.4 大正時代と音楽文化

大正期から昭和初期にかけては、世界の一流の音楽家も度々日本を訪れるようになり、また蓄音機や放送などの普及もあり、音楽文化が広まっていった。

洋楽部門では「浅草オペラ」が新しい民衆娯乐的企業として始まった。これは明治後期から西洋文化が徐々に生活化されて、カフェやバーが都会で見られるようになり、映画館の普及が従来の小劇場や寄席に取って代わるもので、これが浅草オペラの興隆の下地を作ったのである。関西では大正2 (1913) 年に宝塚歌劇団が誕生した。

#### 山田源一郎と宮城道雄

大正に入って日本音楽の近代化も始まった。この中で邦楽界に様式の大きな変化があった。大正8 (1919) 年5月16日の「宮城道雄自作箏曲第一回演奏会」は、宮城道雄の作品のみで構成された音楽会であった。その演奏会の賛助者は、葛原しげる、藤沢古雪、山田源一郎、小山作之助、小松巖、小林愛雄、本居長世の7名であった。宮城の作品に対す評価は二つに割れ、総じて洋楽家や学者、文学者は好意を示したが、邦楽家たちの多くは反感を持った。当時東京音楽学校の教授で箏曲界の重鎮であった今井慶松が反対派の急先鋒だったと町田嘉章は回想している。これに対して洋楽系の雑誌『音楽界』の大正八年の七月号では、山本正夫が「…邦楽界に於いては宮城道雄氏が其新作を発表し、旧来の型にはまった音楽から脱して、山田とか生田とかといふ流派にとらわれない新音楽を創立せんとしたのも、邦楽革新の曙光を投じたものである…」<sup>23</sup>と述べている。当時の女子音楽学校では箏曲もカリキュラムに含まれていたのは山田源一郎の方針でもあったのである。星旭は、宮城道雄の成功の影には吉田晴風の友情と協力があり。また高野辰之、山田源一郎、小山作之助、小松耕輔、本居長世等も良き後援者であったと述べる。<sup>24</sup>

#### 童謡と音楽教育

大正期に特徴的な歌のジャンルとして童謡があげられる。童謡という名称は鈴木三十吉編集の児童雑誌「赤い鳥」(月刊、大正7、1918年、6月創刊) から出ている。鈴木等はこれによって初めて児童唱歌に芸術的な側面を開いた。最初の童謡として有名な「赤い鳥」に載ったのは西条八十作詞、成田為三作曲の「かなりや」であった。「赤い鳥童謡集」第一集(大正8年) から第八集(14年6月) までの中に北原白秋、西条八十の詩、成田為三、広田龍太郎、草川信の曲なる童謡が四十曲収められている。童謡の先駆けとなった唱歌集は吉丸一昌の「新作唱歌」(全10冊明治45～大正3年) である。これは多数の日本人の作曲と少数の外国曲を収め、すべて伴奏付きの曲である。他に関連する唱歌集としては、大正4 (1815) 年から7 (1918) 年にかけて出版された「大正幼年唱歌」があげられる。これは特に児童中心主義の観点から作られており、児童唱歌を主眼とした点で童謡に近いものである。

## 2.5 昭和初期の音楽学校

昭和2（1927）年段階で我が国の音楽学校はどのくらいあったのだろうか。官立は東京音楽学校一校のみであとは全部私学である。

私立の音楽学校については、日本音楽学校、東洋音楽学校、東京高等音楽学院が主要なものである。その他、臨時教員養成所、東京女子音楽学校、宮内省式部職学部、陸軍戸山軍楽生徒隊、海軍軍楽隊派遣所、東京女子体操音楽学校、中央音楽院、大阪音楽学校、大阪女子音楽学校、ハレルヤ楽社、日本コンサバトル（ママ）等があった。

## 2.6 日本音楽学校の誕生と山田源一郎の逝去

昭和2年1月12日山田源一郎は東京府知事平塚廣義宛に「校名変更届」を提出し認可された。亡くなる年の正月明けである。

昭和2（1927）年山田源一郎は、身体に異常を来すようになってきた。小松耕輔によるとかねてから胃ガンを患っていたらしい。<sup>25</sup>しかし5月の6日の日本音楽学校での朝会には出席して、三百名の男女が集合している講堂で、訓辞をしている。その内容は、当時の校長代理の湯谷磋一郎によると、「まもなく入院して手術を受ける。留守は同席している湯谷磋一郎に依頼した。経営の方は弟の山田政三が引き受けた。諸君、諸子依然として毎日勉学に励むように」ということであった。

11日山田源一郎は入院した。14日には胃の手術を受けたが、5月23日午前10時40分心臓麻痺により、その58才の生涯を終えたのである。弟の山田政三によると、最後の息を引き取る時にも「日本音楽学校万歳」と叫ばれたことであった。<sup>26</sup>告別式は、27日午後1時より同校講堂で執り行われた。

告別式の次第は次のようであった。<sup>27</sup>

### 一 読経

### 二 親族焼香

### 三 合唱 「葬式の歌」 指揮 木下保

### 四 弔辞

教職員代表	湯谷磋一郎
生徒代表	山下尚次
日本教育音楽協会長	小山作之助
学習院丁来会	小松耕輔
日本音楽連盟幹事	小林愛雄
東京高等音楽学校長	渡邊敢
日本体育会体操学校長	稲垣三郎

### 五 哀歌

小林愛雄作詞 小松耕輔作曲

指揮 木下保

在りし日の 君をしのびて  
わが涙 いまあらたなり  
みひつぎの 前につどいて  
この歌に名残をおしむ  
在り日の 君をたたえて  
みな祈る  
みたまやすかれ

### 六 挨拶

代表 小松耕輔

### 七 一般焼香

## あとがき

本論文は、日本音楽学校編集（2003）の「日本音楽学校百年史に関わるプロジェクト」の筒石担当分の項目を再構成したものである。本論では日本の音楽教育の先駆者の一人で、楽壇の育ての親とも言える山田源一郎の通史的な個人史と、彼が生きた明治・大正・昭和初期の時代との関わりを述べてきた。山田源一郎は、音楽教育の為に力を尽くし、西洋の遊戯及び舞踊、オペラ、邦楽等も研究し洋の東西を問わず、音楽教育の研究をすすめられたことは特筆に値する。また音楽雑誌『音楽新報』を発刊し、その中で、一般読者に向け音楽の意義を説き、著作に翻訳に、また教科書編纂を行うなど日本の音楽教育の黎明期にあって氏の功績は計り知れないものがある。

## 謝辞

年表等歴史的な資料は、工藤哲朗氏のものを底本として利用させていただいた。ここに感謝申し上げます。

## 注及び参考文献

- 1 生年月日には明治3年という説もあるが、本研究では本人が申告した履歴書の生年月日に従った。
- 2 伶人【れいじん】音楽を奏する人。特に雅楽寮で雅楽を奏する人。楽人（がくじん）楽官。
- 3 堀内敬三（1968）『音楽明治百年史』音楽之友社 p.26
- 4 Ibid., p.29
- 5 Ibid.
- 6 （1987）.『教育評論』第八十一号，明治二十年七月）
- 7 （1889）.『明治22年東京音楽学校学事年報』
- 8 『音楽雑誌』 1891.11, 1894.6
- 9 堀内敬三・井上武士編（1991）『日本唱歌集ワイド版岩波文庫54』岩波書店 p.246
- 10 Ibid., p.251
- 11 堀内敬三（1968）『音楽明治百年史』音楽之友社 p.100
- 12 東京日日新聞，1897.1.5
- 13 『音楽雑誌』 1893.6
- 14 小山作之助 故山田源一郎君の逝去について「日本音楽学校の校史（三）楽苑三号」より
- 15 「私立学校設立認可」『第一種・文書類纂・学事・第七類・私立各学校・1巻』
- 16 日本オペラ振興会編集（1986）『日本のオペラ史』p.82
- 17 「学苑会第一回演奏会聴見記」『音楽新報』三十九年七号
- 18 明治四十一年一月『音楽界』第一巻第一号
- 19 東京芸術大学編（1987）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』p.506
- 20 堀内敬三・井上武士編（1991）『日本唱歌集ワイド版岩波文庫54』岩波書店 p.256
- 21 Ibid.
- 22 加藤長江，白井嶺南（1926）『内外音楽年鑑』p.21
- 23 千葉優子（1999）『箏曲の歴史入門』音楽之友社 p.133
- 24 唐沢富太郎編（1984）『図説教育人物辞典—日本教育史のなかの教育者群像—下巻』ぎょうせい
- 25 小松耕輔（1961）『わが思いでの楽壇』音楽之友社 p.15
- 26 Ibid.
- 27 日本音楽学校楽苑会編（1927）『楽苑三号追悼号』pp.4~9

資料1 山田源一郎年表 (工藤哲朗・筒石賢昭編)

出典：

- 石井進、笠原一男、児玉幸多、笹山晴男 (2000) 『詳説日本史』 山川出版社  
 岩井正浩編 (1978) 『資料 日本音楽教育小史』 青葉図書  
 遠藤宏 (1948) 『明治音楽史考』 有朋堂  
 海後宗臣編纂 (1965) 『日本教科書体系 近代編 第二十五巻 唱歌』 講談社  
 加藤長江、白井嶺南 (1926) 『内外音楽年鑑楽壇名士録 1927, 1928年版』 太平洋書房  
 小宮豊隆 (1954) 『明治文化史 第九巻 音楽・演芸編』 洋々社  
 東京音楽学校編 (1926) 東京音楽学校卒業生氏名録  
 東京芸術大学音楽取調掛研究班編 (1976) 『音楽教育成立への軌跡』 音楽之友社  
 東京都公文書館所蔵資料  
 堀内敬三 (1968) 『音楽明治百年史』 音楽之友社  
 山住正巳 (1967) 『唱歌教育成立過程の研究』 東京大学出版会  
 山田源一郎履歴書 東京芸術大学音楽研究センター所蔵

年	山田源一郎	音楽・教育界の変遷	社会・文化の変遷
1869 (明治2)	・10月17日 東京府士族(旧曾我野藩)として、東京砺穀町(昭和初期には地名変更により神田錦町)に於いて生まれる。		
1870 (明治3)		・フェントン島津藩に軍楽を伝習	・大教宣布の勅令を發布 ・横浜毎日新聞発刊
1871 (明治4)		・文部省設立	・岩倉使節団派遣 ・日清修好条規
1872 (明治5)		・学制発布	・富岡製糸工場官営模範工場) ・新橋-横浜間に鉄道開通 ・福沢諭吉『学問ノススメ』
1873 (明治6)			・征韓論で政府分裂 ・明六社設立 ・キリスト教禁止の高札を撤廃
1874 (明治7)		・東京女子師範学校附属幼稚園開設 ・伊沢修二愛知師範学校校長任命	・自由民権運動始まる。 ・台湾出兵
1875 (明治8)		・伊沢修二師範学科取調員として米へ留学	・樺太千島交換条約
1876 (明治9)		・宮中で伶人が初めてヨーロッパ音楽を演奏	・日朝修好条規
1877 (明治10)		・東京大学設立	・西南戦争
1878 (明治11)		・式部寮雅楽部『保育唱歌』 ・式部寮雅楽部『遊戯唱歌』 ・東京女子師範学校附属幼稚園で唱歌による保育伊沢修二目賀田種太郎と連名で文部大輔田中不二麿に上申書提出 ・伊澤修二米国より帰国 東京師範学校校長に就任 ・フェノロサお雇い外国人教師として来日 ・京都女学校『唱歌』	・エジソン蓄音機発明
1879 (明治12)		・文部省内に音楽取調掛が設置 ・伊澤修二、音楽取調掛長に任命 ・教育令制定	・琉球を領有

1880 (明治13)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・L.W. メーソン来日 東京師範学校附属小学校と東京女子師範学校附属幼稚園で唱歌教授を行う。</li> <li>・教育令改正</li> <li>・音楽取調掛伝習生募集</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西川虎吉我が国初めて風琴(オルガン)を試作</li> </ul>
1881 (明治14)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽取調掛編纂『小学唱歌集-初編』</li> <li>・音楽取調掛『唱歌掛図-初編・続編』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・政党政治始まる</li> </ul>
1882 (明治15)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・L.W. メーソン帰国</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本銀行設立</li> </ul>
1883 (明治16)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽取調掛編纂『小学唱歌集-第二編』</li> <li>・音楽取調掛編纂『唱歌掛図-第二編』</li> <li>・海軍省雇教師エッケルトを音楽取調掛が招聘</li> <li>・我が国最初のバイオリン製造(鈴木政吉)</li> <li>・音楽取調掛『音楽問答』</li> <li>・音楽取調掛『楽典』</li> <li>・音楽取調掛『音楽指南』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿鳴館が落成開館</li> </ul>
1884 (明治17)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月11日 文部省直轄音楽取調掛(明治20年東京音楽学校と改称)へ入学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽取調掛編纂『小学唱歌集-第三編』</li> <li>・音楽取調掛編纂『箏曲集-初編』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秩父事件</li> </ul>
1885 (明治18)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽取調掛第一回全科卒業式(幸田延也)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内閣制度制定</li> <li>・森有礼文部大臣</li> <li>・坪内逍遙『小説神髓』</li> </ul>
1886 (明治19)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校令「小学校令」,「中学校令」教科書検定制度開始</li> <li>・師範学校令</li> <li>・帝国大学令交付</li> <li>・エッケルト音楽取調掛を辞職</li> <li>・音楽鑑賞団体「大日本音楽会」設立</li> </ul>	
1887 (明治20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5月2日 音楽取調掛男生徒頭</li> <li>・師範部と専修部が文設された際、専修部に編入学。</li> <li>・我が国最初の弦楽四重奏団が編成され、そのメンバーに加わった。 第一ヴァイオリン 幸田延子 第二ヴァイオリン 山田源一郎 ヴィオラ 納所弁次郎 セロ 比留間賢八</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科用図書検定規則</li> <li>・音楽取調掛編纂『幼稚園唱歌集』</li> <li>・音楽取調掛が東京音楽学校となる。</li> <li>・岡村増太郎作詞、四龍訥治作曲『家庭唱歌』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京府中に初めて電灯つく。</li> <li>・鹿鳴館仮装舞踏会開催</li> <li>・二葉亭四眼『浮き雲』</li> </ul>
1888 (明治21)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽取調掛東京音楽学校に改称(伊澤修二初代東京音楽学校長兼任)</li> <li>・東京音楽学校編纂『箏曲集』</li> <li>・東京唱歌専門学校(小学校教員養成)設立</li> <li>・大和田建樹作詞、奥好義作曲『明治唱歌』</li> <li>・原田砂平編「新撰 小学唱歌集」</li> <li>・小中村清矩『歌舞音楽略史』</li> <li>・文部省『楽典初歩』(カリ一著、内田彌一訳)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・枢密院設置</li> </ul>

1889 (明治22)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7月6日東京音楽学校本科専修部卒業</li> <li>・ 同日研究生 授業補助</li> <li>・ 9月16日尋常師範学校、尋常中学校及び高等女学校音楽科教員免許状を取得</li> <li>・ 東京府尋常中学校唱歌授業を囑託</li> <li>・ 9月24日東京府より唱歌速成伝習所教授を囑託</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校編纂『中等唱歌集』</li> <li>・ 日本での最初のピアノ製造</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大日本帝国憲法発布</li> </ul>
1890 (明治23)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4月25日 高等師範学校附属学校唱歌教授囑託</li> <li>・ 5月9日東京府尋常中学校唱歌授業囑託を解く</li> <li>・ 12月頃 東京府唱歌速成伝習所卒業試験担当となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校令改正</li> <li>・ 教育勅語発布</li> <li>・ 共立唱歌学校設置</li> <li>・ 田中正平ベルリンにて純正調オルガン試作</li> <li>・ 日本最初の音楽雑誌『音楽雑誌』発刊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第一回衆議院選挙</li> <li>・ 第一回帝国議会開催</li> <li>・ 教育二関スル勅語発布</li> <li>・ 森鷗外『舞姫』</li> </ul>
1891 (明治24)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3月31日東京府唱歌速成伝習所閉鎖により解職</li> <li>・ 10月6日高等師範学校依頼解雇</li> <li>・ 10月14日 東京音楽学校依頼授業補助を解く</li> <li>・ 11月19日 大阪府尋常師範学校助教授兼大阪府尋常中学校助教任命</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校祝日大祭日儀式規定</li> <li>・ 小学校教員検定等に関する規則</li> <li>・ 小学校教則大綱</li> <li>・ 東京音楽学校存廃問題</li> <li>・ 伊澤修二、東京音楽学校長離職</li> <li>・ 東京音楽学校第二代校長村岡為駄</li> <li>・ 岩城寛編『新定唱歌集』</li> <li>・ 小山作之助『国民唱歌集』</li> <li>・ 鳥居忱『音楽理論』</li> <li>・ 神津専三郎『音楽利害』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大津事件</li> <li>・ 足尾鉍毒事件</li> <li>・ 幸田露伴『五重塔』</li> <li>・ 内村鑑三、教育勅語を礼拝せず辞職</li> </ul>
1892 (明治25)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4月28日祝日大祭日歌詞曲を囑託</li> <li>・ 6月17日 大阪府小学校教員乙種検定員</li> <li>・ 8月27日 東京府尋常師範学校助教諭</li> <li>・ 10月10日 東京府小学校教員乙種検定員</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祝祭日用歌詞及び楽譜</li> <li>・ 教科書裁定に関する件</li> <li>・ 尋常師範学校学科及び其程度の改正</li> <li>・ ハウ編『幼稚園唱歌』</li> <li>・ 伊澤修二『小学唱歌』(～明治26年)</li> <li>・ 大和田建樹『尋常小学 帝国唱歌』</li> <li>・ 大和田建樹『高等小学 帝国唱歌』</li> <li>・ 平川雄三郎『尋常科・高等科 小学唱歌』</li> <li>・ 納所辨次郎『日本軍歌』</li> </ul>	
1893 (明治26)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5月31日 小学校教員定期講習科講師</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校、高等師範学校附属音楽学校に校名変更</li> <li>・ 東京音楽学校第三代校長嘉納治五郎</li> <li>・ 上原六四郎主事</li> <li>・ 文部省『祝日大祭日歌詞並楽譜』制定</li> <li>・ 白井規矩郎『小学唱歌集』</li> <li>・ 佐々木信綱『幼年唱歌集』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 福島安正シベリア遠征</li> <li>・ 雑誌『文学界』創刊</li> </ul>
1894 (明治27)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2月7日高等師範学校附属音楽学校教務囑託</li> <li>・ 7月25日学校唱歌講習会講師</li> <li>・ 11月頃 臨時大捷軍歌講習会講師</li> <li>・ 12月24日 小学校教員講習科講師</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校小学唱歌講習科新設(明治33年9月乙種師範かと改める。)</li> <li>・ 奥好義『歴史唱歌』</li> <li>・ 小山作之助『忠実勇武軍歌集』</li> <li>・ 鈴木米次郎・納所辨次郎『明治軍歌』</li> <li>・ 白井規矩郎『小学唱歌集』</li> <li>・ 中村秋香(詞) 小山作之助(曲)『大婚二十五年 奉祝唱歌』</li> <li>・ 外国のオペラの最初の上演「ファウスト」(東京音楽学校)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 治外法権撤廃</li> <li>・ 東学党の乱</li> <li>・ 日清戦争(～1895)</li> </ul>



1895 (明治28)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月6日 大捷軍歌講習会講師</li> <li>・ 9月7日 高等師範学校付属音楽学校助教</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校編『大元帥陛下奉迎の歌』</li> <li>・ 東京音楽学校編『戦死者を弔ふ歌』</li> <li>・ 東京音楽学校編『凱旋の歌』</li> <li>・ 目賀田万世吉『帝国読本唱歌』</li> <li>・ 小山作之助『かちどき』</li> <li>・ 菟道春千代『国民軍歌』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 下関条約締結</li> <li>・ 三国干渉</li> <li>・ 樋口一葉『たけくらべ』</li> </ul>
1896 (明治29)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4月18日 同声会春季(第一回)音楽演奏会でバイオリンを演奏(幸田延子紹介演奏会)</li> <li>・ 9月7日 音楽実状視察のため千葉県及び茨城県下巡回</li> <li>・ 9月23日 同じく視察のため千葉県及び茨城県下巡回</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校編『孝明天皇祭』</li> <li>・ 山田源一郎『大捷軍歌』</li> <li>・ 豊美重由・元橋義敦『教育勅語唱歌集』</li> <li>・ 教育音楽講習會編『新編教育唱歌集』</li> <li>・ 上原六四郎『俗楽旋律考』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 蓄音機が輸入される。</li> <li>・ 中尾都山「都山流」尺八創始</li> </ul>
1897 (明治30)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 10月26日 音楽学校学友会臨時音楽会唱歌 指揮</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校編『泰悼の歌』</li> <li>・ 山田源一郎『教科適用新唱歌』</li> <li>・ 唱歌調, 学校を中心として民衆に広まる。</li> <li>・ 東京音楽学校第四代校長河内信明</li> <li>・ 東京音楽学校第五代校長嘉納治五郎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 金本位制採用</li> <li>・ 尾崎紅葉『金色夜叉』</li> <li>・ 『ホトトギス』創刊</li> </ul>
1898 (明治31)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月 「明治音楽会」(我が国最初の民間管弦楽団体)設立メンバーに加わる。</li> <li>・ 2月13日 学校唱歌会講師</li> <li>・ 6月11日 音楽学校学友会臨時音楽会唱歌指揮</li> <li>・ 7月14日 音楽学校楽器掛</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高等師範学校附属音楽学校第六代校長矢田部良吉</li> <li>・ 全国尋常中学校会議開催(文部省から音楽を中学校の必須科目となす提案)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「明治音楽会」創設</li> <li>・ 万国郵便条約批准公布</li> <li>・ 国木田独歩『武蔵野』</li> </ul>
1899 (明治32)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月9日 音楽学校生徒掛</li> <li>・ 4月5日 4月29日 女子高等師範学校授業囑託</li> <li>・ 5月12日 東京音楽学校教授</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校編『小学唱歌集ピアノオルガン楽譜』</li> <li>・ 高等女学校令</li> <li>・ 高等師範学校附属音楽学校を東京音楽学校と改称</li> <li>・ 東京音楽学校第七代校長渡邊龍聖</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 条約改正</li> <li>・ 『中央公論』創刊</li> </ul>
1900 (明治33)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5月18日 文部省師範学校, 中学校, 高等女学校教員夏期講習会音楽科講師囑託</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校編『祝日大祭日唱歌重音譜』</li> <li>・ 東京音楽学校編『東宮殿下御慶事奉祝の歌』</li> <li>・ 小学校令改正</li> <li>・ 言文一致唱歌の出現</li> <li>・ 納所弁次郎, 田村虎蔵編『教科適用幼年唱歌』(~35年)</li> <li>・ 『新選国民唱歌』</li> <li>・ 『鉄道』</li> <li>・ 改正小学校令改正</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 治安警察法</li> <li>・ 義和団事件</li> <li>・ 泉鏡花『高野聖』</li> </ul>
1901 (明治34)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5月16日 文部省師範学校, 中学校, 高等女学校教員夏期講習会音楽科講師囑託</li> <li>・ 6月 遊戯講習会講師</li> <li>・ 12月25日 神田中学校遊戯体操講習会講師</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校編纂『中学唱歌』に「荒城の月」「箱根八里」が掲載</li> <li>・ 『公德唱歌』</li> <li>・ 『幼稚園唱歌』</li> <li>・ 『散歩唱歌』</li> <li>・ 『世界一週唱歌』</li> <li>・ 巖本捷治, 高折週一『音楽之友』創刊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ この頃より旧制高校の「寮歌」が全国的に普及</li> <li>・ 与謝野晶子『みだれ髪』</li> <li>・ 八幡製鉄所操業開始</li> </ul>

筒石：山田源一郎研究 (I) — その生涯と教育的業績

1902 (明治35)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 8月16日浅草東光内音楽講習会講師</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 台湾小学校規則</li> <li>・ 教科書疑獄事件発生。国定教科書の要因となる。</li> <li>・ 鈴木米次郎, 野村成仁『新編中等唱歌集』</li> <li>・ 東京音楽学校第八代校長大島義脩</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日英同盟締結</li> </ul>
1903 (明治36)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 10月 音楽遊戯協会 (音楽指導と幼稚園教員養成機関) 創立 理事長山田源一郎 名誉会長 伊澤修二</li> <li>・ 音楽遊戯協会「常設講習会」創設</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 専門学校令公布</li> <li>・ 小学校令改正, 小学校教科書検定制から国定制</li> <li>・ 『音楽』創刊</li> <li>・ プロテスタント各派統一して『賛美歌』出版</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 平民社設立</li> <li>・ 岡倉天心『東洋の思想』(英文)</li> </ul>
1904 (明治37)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2月3日 「音楽新報」山田源一郎主宰, 小松幸輔編集創刊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 言文一致唱歌</li> <li>・ 音楽遊戯協会講習所規則</li> <li>・ 東京音楽学校第九代校長高嶺秀夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日露戦争 (~1905)</li> </ul>
1905 (明治38)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 8月 音楽遊戯協会が日本音楽学校と改称</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 石倉小三郎『西洋音楽史』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ポーツマス条約調印</li> <li>・ アインシュタイン「相対性原理」</li> </ul>
1906 (明治39)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月12日 女子音楽学校設立認可</li> <li>・ 2月1日 女子音楽学校創立 校長</li> <li>・ 男子を対象とした日本音楽協会併設</li> <li>・ 3月 女子音楽学校生徒募集 普通科, 本科, 専修科</li> <li>・ 音楽新報社の新事業として, 小松耕輔, 小林愛雄らと楽苑会を創立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 山葉寅楠, 日本楽器製造株式会社設立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 南満州鉄道設立</li> <li>・ 夏目漱石『坊ちゃん』</li> <li>・ 島崎藤村『破戒』</li> </ul>
1907 (明治40)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 8月3日 全国音楽家懇親会開催 発起人: 鳥居枕, 山田源一郎等</li> <li>・ 明治大学音楽部が指導者として招聘</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校令改正, 尋常小学校6カ年が義務教育となる。この頃から全国の小学校に国定教科書を使用することになった。</li> <li>・ 師範学校規定</li> <li>・ 山田源一郎編『中等教育唱歌集』</li> <li>・ 東洋音楽学校創立 (東京音楽大学の前身)</li> <li>・ 東儀鉄笛『音楽通解』</li> <li>・ 東京音楽学校第十代校長湯原元一</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ジェームス『プラグマティズム』</li> </ul>
1908 (明治41)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月 「音楽新報」は「音楽」と合併し「音楽界」となる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 福井直秋『初等声学』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 『アララギ』創刊</li> </ul>
1909 (明治42)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3月6日 土曜会第四回開会 一ツ橋分教場</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京音楽学校編『中等唱歌』</li> <li>・ 天谷秀, 近藤逸五郎編『女声唱歌』</li> <li>・ 日本橋三越少年音楽隊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国産蓄音機発売</li> <li>・ 田山花袋『田舎教師』</li> <li>・ 伊藤博文暗殺</li> </ul>
1910 (明治43)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文部省『尋常小学読本唱歌』</li> <li>・ 岩崎小弥太「東京フィルハーモニー会」</li> <li>・ 『音楽』創刊 (牛山充編集, 東京音楽学校校友会発行)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大逆事件</li> <li>・ 韓国併合</li> <li>・ 宮城道雄『水の変態』</li> <li>・ 武者小路実篤等「白樺」創刊</li> </ul>
1911 (明治44)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3月 高等師範学校教授</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文部省『尋常小学唱歌』(学年別, 大正3年まで発行)</li> <li>・ 東京音楽学校校友会編『ジーパー氏唱歌法』</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 条約改正</li> <li>・ 辛亥革命</li> <li>・ 西田幾多太郎『善の研究』</li> </ul>
1912 (明治45・大正元)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 吉丸一昌『新作唱歌』(~大正4年)</li> <li>・ 『月刊楽譜』創刊 (山野楽器店)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第一次護憲運動</li> <li>・ 清朝倒れ中華民国成立</li> <li>・ ラッセル『哲学の諸問題』</li> </ul>

1913 (大正2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2月20日 神田の大火災にて、女子音楽学校、日本音楽協会及び山田源一郎邸を全焼</li> <li>・3月女子音楽学校、京橋竹川町の共益商社楽器店の二階(仮校舎)で授業</li> <li>・4月20日 女子音楽学校再築費補助慈善音楽会 東京音楽学校奏楽堂</li> <li>・8月1日 女子音楽学校夏季講習会</li> <li>・11月2日 女子音楽学校落成記念音楽会、同校新校舎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文部省、全国各地の師範学校に対し『尋常小学唱歌』について意見を求める。(～大正4年)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フッサール『イデー』</li> </ul>
1914 (大正3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月7日 高等師範学校囑託</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・第一次世界大戦(～1918)</li> </ul>
1915 (大正4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御大典奉祝唱歌楽譜審査委員囑託</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小松耕輔、梁田貞、葛原幽『大正幼年唱歌』(～大正8年)</li> </ul>	
1916 (大正5)			<ul style="list-style-type: none"> <li>・吉野作造「民本主義」を提唱</li> </ul>
1917 (大正6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・12月9日 女子音楽学校15年記念音楽会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伊澤修二没</li> <li>・私立正常小学校創設</li> <li>・東京音楽学校第十一代校長茨木清次郎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロシア革命</li> <li>・フロイト『精神分析入門』</li> </ul>
1918 (大正7)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京音楽学校第十二代校長村上直次郎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シベリア出兵</li> <li>・『赤い鳥』(鈴木三重吉)発刊</li> <li>・米騒動</li> <li>・政党内閣</li> </ul>
1919 (大正8)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校令改正</li> <li>・小学校令施行規則の改正</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・五・四運動起こる</li> <li>・パリ講和会議</li> <li>・『赤い鳥童謡』</li> </ul>
1920 (大正9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月9日 宮内省任学習院講師(大正12年3月まで)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福井直秋、児童発声研究会開催</li> <li>・草川宣雄、頭声発声提唱</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際連盟脱退</li> <li>・「新日本音楽運動」起こる。</li> </ul>
1921 (大正10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月10日 日本音楽連盟幹事報告 山田源一郎</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学唱歌歌詞批判(北原白秋)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワシントン会議</li> </ul>
1922 (大正11)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2月6日 「ヴァイオリンの弾き方」アルス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本教育音楽協会設立(会長 小山作之助)</li> </ul>	
1923 (大正12)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月1日 関東大震災により女子音楽学校校舎全焼</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『教育音楽』発刊</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関東大震災</li> <li>・井伏鱒二『山椒魚』</li> </ul>
1924 (大正13)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月28日 校則一部変更の書類を提出</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・第二次護憲運動</li> </ul>
1925 (大正14)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月20日 女子音楽学校 日本音楽協会入学案内</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・治安維持法公布</li> <li>・普通選挙法</li> <li>・ラジオ放送開始</li> </ul>
1926 (大正15)		<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校令の改正</li> <li>・幼稚園令</li> <li>・東京高等音楽学校創立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・川端康成『伊豆の踊り子』</li> <li>・幼稚園令交付</li> </ul>
1927 (昭和2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月 女子音楽学校と日本音楽協会を合併して日本音楽学校とする。</li> <li>・5月11日 山田源一郎手術の為に駿河台病院に入院</li> <li>・5月23日 病没</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・金融恐慌</li> <li>・ハイデッガー『存在と時間』</li> </ul>

## 資料2 山田源一郎作品・著書所蔵目録（工藤哲朗・筒石賢昭編）

年	作品・著書	出版社
1891 (明治24)	・ 5月 山田源一郎編「どんちや節」『音楽雑誌』(1891年5月号)	音楽雑誌社
1892 (明治25)	・ 4月 『図解ヴァイオリン指南』 The first book for violin method	大阪：三木佐助商店
1894 (明治27)	・ 3月 篠野十一郎作歌，山田源一郎作曲「奉祝児歌」 ・ 4月 パロウ『普通音楽教科書』(山田源一郎，白井規矩郎訳) ・ 5月 奥好義編『歴史唱歌』 作詞者 阪正臣，鳥山啓，中村秋香，小中村義象 作曲者 上真行，納所弁次郎，山田源一郎，小山作之助 『音楽雑誌』(1894年5月号) ・ 9月 山田源一郎編『風琴用唱歌集 第一巻』 ・ 11月 山田源一郎編『大捷軍歌 (全7編)』，明治27年～30年 明治27年『第一編 第二編』 明治28年『第三編 第四編 第五編』 明治29年『第六編』 明治30年『第七編』 ・ 12月 山田源一郎編『教科摘要討清軍歌，第二編』	成美堂 暹雲堂  共益商社 十字屋書店；開新堂  開新堂書店
1895 (明治28)	・ 3月 小山作之助編『忠勇軍唱歌集』 鳥山啓作詞 山田源一郎作曲「6 鬼將軍」 ・ 12月 山田源一郎「招魂祭の歌」	共益商社
1896 (明治29)	・ 1月 山田源一郎『大捷軍歌』 ・ 1月 山田源一郎「唱歌教授法の観点」『音楽雑誌1896.1月号』 ・ 5月 山田源一郎『大捷軍歌』(第4，5，6編) ・ 8月 中村秋香作歌 山田源一郎作曲他5名作曲「教科用帝国軍歌」(『音楽雑誌1896.8月号』) ・ 8月 山田源一郎「夕立」『音楽雑誌』(1896年8月号) ・ 11月 山田源一郎「唱歌教授法の観点」『音楽雑誌』(1896年11月号)	音楽雑誌社  音楽雑誌社
1897 (明治30)	・ 2月 山田源一郎編『教科適用新唱歌 第一編』	十時屋
1898 (明治31)	・ 5月 山田源一郎編『教科適用新唱歌 第二編』	十時屋
1900 (明治33)	・ 8月 『女学唱歌老巻』 山田源一郎の作品 忍ぶのころも 歓迎の歌 四季の歌 卒業式の歌 ・ 9月 大月如電作詞，山田武城作曲，山田源一郎校閲『東京唱歌』 ・ 10月 大月如電作詞，山田源一郎・野村成仁作曲 『軍艦唱歌』 ・ 10月 大和田建樹作歌；多梅稚，納所辨次郎，山田源一郎，田村虎蔵作曲 『世界唱歌：地理教育』別タイトル「地理教育世界唱歌」 ・ 11月 大月如電作詞，山田源一郎作曲『陸軍唱歌』 ・ 11月 恒川鏝之助著，山田源一郎作曲『地理歴史三重県唱歌』	共益商社  正文堂 秀英舎 大阪：三木佐助商店  秀英舎 四日市：伊藤書店
1901 (明治34)	・ 2月 秀英舎編集所作歌，山田源一郎作曲『千葉県郷土唱歌』 ・ 5月 山田源一郎『女学唱歌新巻』 ・ 6月 三山春次著，山田源一郎作曲『地理教育神奈川県唱歌』 9月 林夔臣作歌，山田源一郎作曲；渡邊龍聖校閲『脩身唱歌：教育勅語』 別タイトル：修身唱歌：教育勅語；教育勅語脩身唱歌；教育勅語修身唱歌 ・ 10月 龍昇子作詞，山田源一郎作曲『公德唱歌』 ・ 11月 友田宜剛著，山田源一郎作曲，高橋忠次郎作戯『姫鏡』 ・ 12月 山田源一郎，高橋忠次郎編『実験唱歌遊戯教科書』 (小川昂編，洋楽の本)	秀英舎 共益商社 秀英舎 君民同祖書院  田沼書店 榊原文盛堂 目黒書店

1902 (明治35)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月 中島角次編, 山田源一郎校閲『日東唱歌 雪の巻上・下』</li> <li>・ 3月 大和田建樹著, 山田源一郎作曲『地理教材風景唱歌』6月 山田源一郎「音楽普及法に就いて」『音楽之友』</li> <li>・ 7月— 36年11月 山田源一郎 連載「楽理 和声楽 一般」『音楽之友』1902.7-12, 1903.2,3,6,8,9-11』</li> <li>・ 11月 山田源一郎「仏教と音楽」『音楽之友』</li> </ul>	芙蓉館 楽友社 楽友社 楽友社
1903 (明治36)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月 山田源一郎作曲「小式部内侍」『音楽之友』</li> <li>・ 2月 小出新次郎作歌, 山田源一郎作曲『裁縫唱歌』 (東京日日新聞 1903.3.7, p.7)</li> <li>・ 10月 山田源一郎編『山田唱歌集, 上巻』</li> <li>・ 12月 山田源一郎, 多梅稚『初等楽典教科書』</li> </ul>	楽友社 女子裁縫高等学院 十字屋 東京開成館
1904 (明治37)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3月 山田源一郎, 多梅稚(再販)『初等楽典教科書』</li> <li>・ 2月 山田源一郎, 酒井勝軍, 小松耕輔編集『音楽新報』創刊(明治41年1月『音楽』と合併して『音楽界』となる。</li> <li>・ 3月 中島角次作詞, 山田源一郎作曲「うてやうてうて」『音楽新報』</li> <li>・ 8月 大和田建樹作曲, 山田源一郎作曲「国民軍歌 旅順の海戦」『音楽新報』</li> <li>・ 山田源一郎「教材選択」『音楽講義録』大日本音楽教師会編(三浦俊三郎著 本邦洋楽変遷史に所載)</li> </ul>	東京・大阪開成館 音楽新報社 音楽新報社 音楽新報社
1905 (明治38)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3月 山田源一郎「国民楽の将来」『音楽新報』</li> <li>・ 3月~40.10 山田源一郎「和声学新講」連載 1905.4-5, 1906.4,5,10,12, 1907.2.6.-10</li> <li>・ 7月 山田源一郎「仏教と音楽」</li> <li>・ 11月 山田源一郎「婦人と楽才」</li> </ul>	音楽新報社 音楽新報社 音楽新報社 音楽新報社
1906 (明治39)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月 山田源一郎「四季の團楽」(まとい)『女学世界』</li> <li>・ 3月 山田源一郎「春の野遊」 柴垣社中作歌 山田源一郎作曲『女学世界』</li> <li>・ 6月 山田源一郎「家庭における音楽」『女学世界』</li> <li>・ 6月 井上頼圀作歌 山田源一郎作曲『農業教育 害虫唱歌』</li> <li>・ 6月 都良香(カンタータ形式) 平木白星作詞, 山田源一郎作曲『音楽新潮』</li> <li>・ 8月 辻村艦作歌, 山田源一郎作曲「夏の夜」「序曲」</li> <li>・ 9月 山田源一郎「シュウマンの楽訓をよみて」『音楽新報』</li> <li>・ 11月 山田源一郎「歌劇の変遷」『音楽新報』</li> </ul>	博文館 博文館 博文館 三石堂 平凡社『音楽大事典』(1981) 音楽新報社 音楽新報社
1907 (明治40)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6月 武島羽衣作歌 山田源一郎作曲「夕べの團楽」『音楽新報』</li> <li>・ 8月 山田源一郎編『中等教育唱歌集』</li> </ul>	音楽新報社 共益商社
1908 (明治41)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月 山田源一郎「唱歌教授の時弊」『音楽界』</li> </ul>	楽界社
1909 (明治42)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 10月 後藤新平作詞 山田源一郎作曲「大国民之歌」</li> </ul>	如山堂書店
1910 (明治43)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1月 東京音楽学校『中等唱歌』</li> <li>・ 2月 山田源一郎「女子と音楽」『音楽界』</li> </ul>	東京音楽学校 楽界社
1911 (明治44)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6月 女子音楽学校長 山田源一郎「家庭の清興」『音楽界』</li> <li>女子音楽学校長 山田源一郎「国交と国家」『時事新報』三浦俊三郎著『本邦洋楽変遷史』(1931)</li> <li>山田源一郎「音楽を学ぶ心得」『時事新報』</li> <li>三浦俊三郎著『本邦洋楽変遷史』(1931)</li> </ul>	楽界社 龍溪書舎 日東書院 龍溪書舎 日東書院
1917 (大正6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6月 山田源一郎編『小学唱歌集伴奏譜 全一冊』</li> </ul>	共益商社
1918 (大正7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7月 山田源一郎「官立音楽学校入学受験者に注意」『音楽界』</li> <li>・ 7月 山田源一郎「家庭音楽の必要」『音楽界』</li> </ul>	楽界社 楽界社
1921 (大正10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 7月 山田源一郎『楽譜の読み方』</li> <li>・ 10月 山田源一郎『ヴァイオリン速成講義録』</li> </ul>	アルス 大日本音楽普及会
1922 (大正11)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 11月 山田源一郎『ヴァイオリンの弾き方』</li> <li>・ 12月 山田源一郎『マンドリンの弾き方』</li> </ul>	アルス アルス
1926 (大正15)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 11月 山田源一郎編『現代楽典教本』</li> </ul>	泰文堂

筒石：山田源一郎研究 (I) — その生涯と教育的業績

1911 (明治44)	・ 6月 山田源一郎「家庭の清興」『音楽界』	楽界社
1917 (大正6)	・ 6月 山田源一郎編『小学唱歌集伴奏譜 全一冊』	共益商社
1918 (大正7)	・ 7月 山田源一郎「官立音楽学校入学受験者に注意」『音楽界』	楽界社
	・ 7月 山田源一郎「家庭音楽の必要」女子音楽学校長『音楽界』	楽界社
1921 (大正10)	・ 7月 山田源一郎『楽譜の読み方』	アルス
	・ 10月 山田源一郎『ヴァイオリン速成講義録』	大日本音楽普及会
1922 (大正11)	・ 11月 山田源一郎『ヴァイオリンの弾き方』	アルス
	・ 12月 山田源一郎『マンドリンの弾き方』	アルス
1926 (大正15)	・ 11月 山田源一郎編『現代楽典教本』	泰文堂
1927 (昭和2)	・ 5月23日 病没	

